

ポर्टレート
Portrait

「マッサージ院は、ミャンマーの視覚障害者と
晴眼者の相互理解の場になっています」

西垣充氏



▲「GENKY CLINIC」とスタッフたち

民主化され開放ムードに沸くミャンマーで、視覚障害者によるマッサージ事業に取り組む日本人がいる。西垣充氏は1998年からミャンマーで観光やコンサルティングなどのビジネスを立ち上げ、3年前の2009年からは視覚障害者が働くマッサージ院「GENKY CLINIC」を開設。現在ヤンゴン市内に2店舗を構えている。経営する治療院について、西垣氏はこう語る。

「視覚障害者が働くマッサージ院は自立支援だけではなく、マッサージを通して晴眼者と視覚障害者が交流し、視覚障害者の現状を知る相互理解の場として最も有効だと感じています」

治療院の収益を活動資金にしたNPOを設立し、これまで視覚障害を持ちながら盲学校に通えず大人になってしまった視覚障害者に対してマッサージを教える活動なども展開。この活動はミャンマー政府からも評価され、支援を受けることができた。「この3年間で、ミャンマーにおける視覚障害者を取り巻く環境はずいぶん変わったと思います」と振り返る。

西垣氏はまるで引き寄せられるようにして、

▼ミャンマーの旧都ヤンゴン



ミャンマーにたどり着いた。学生時代から留学や旅行を通じて、異文化に魅了されてきた。学生最後の思い出に出発したアジア旅行

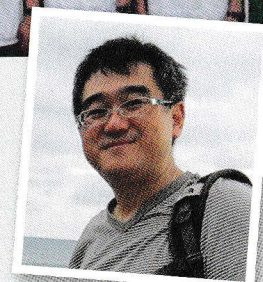
でコースに入っていなかったミャンマーに偶然立ち寄った。その滞在期間はなんと2カ月。

「初めて見たミャンマーの印象は『なんとかしなければいけない』でした。急成長を遂げるベトナムや、国際的な援助を受けるであろうカンボジアに比べて、成長する要素が見当たらなかったのです」

いつかミャンマーに貢献したいという思いを胸に帰国。コンサルティング会社に就職し、忙しい日々を送っていたが、1995年、民主化指導者のアウンサンスーチー女史が解放されたというニュースが飛び込んでくると、いてもたってもいられずミャンマーに飛び、起業した。

「まだまだやるべきことも多く残されており、ひとつひとつ実現していければと思っています。今後はマッサージ院を軸に、視覚障害者の自立支援のみならず、いかにミャンマー国内の視覚障害者数を減少させるか、という根本の課題を解決すべく、様々な活動していければと思っています」

これからますます変貌するミャンマーで、その熱気のなか、西垣氏はマッサージ事業を通じてミャンマーのために汗を流している。



▲西垣充氏

